

1

吸血鬼というものを知っているだろうか。

オレでさえ知っているのだから、ほとんどの人間は知ってるだろう。バンパイアだったりヴァンピルだったりドラキュラだったりするが、まあ呼び名はどつでもいい。

問題は、現実それが存在するということだ。

「その、いわゆる『吸血鬼』っていつヤツに、なっちゃったみたいなんだよね」

あはは、と遊戯がオレの目の前で笑った。

*

武藤 遊戯は、オレこと城之内 克也の親友である。

高校一年のときと同じクラスになって、ひよんなことからタチになった。オレは中学時代から新聞配達をする優良健康不良少年として知られていたし、遊戯は休み時間中にひとりゲーム（しかも黒ヒゲ危機一髪）をやっている

というインドアオタク志向の人間だった。

水と油のように合いそうもない相手だと思っていたのだが、つるみはじめると、案外ウマがあった。

紆余曲折を経て、オレたちは親友だと言える間柄になった。

高校生だというのに、小学生料金で映画が見ることが可能というところから察してほしいが、遊戯はチビで貧弱でおよそ年相応には見られない男だった。体格がちいさいだけならともかく、顔つきもガキっぽかった。顔の半分を占めてるんじゃないかといつぐらい、でっかい目が問題なんだと思う。あと成長期一歩手前の子供みたいな、肉のついていない、すんなりした手足とか。

そんなチビの遊戯が、春休みに海外旅行にでかけることになった。

ヨーロッパに一人旅だ。

*

「なんでよ」

高校二年の終業式のあとの教室でオレはたずねた。旅行はいいが、一人で行く必要はねえだろ。しかも、こんな直

前に言いやがって。

「遊戯はてへへと笑いながら答えた。

「ジークさんから、招待つけて」

ジークというのは、ジークフリード・フォン・シュレIDERというクソ長い名前をもつドイツ男で、オレたちとたいては変わらない年のくせに、シュレIDER社というつかい会社を経営していた。

まあ、そんなのはどうでもいい。世の中には十歳で会社を設立するやつだっている。新聞やテレビのニュースでそついつのもたまに見るだろつ。だいたいオレたちには身近くに海馬コーポレーションの社長をやっている海馬というこ立派な見本がいた。

海馬は、オレたちのクラスメイトで、友人というには憚られるが、知人というには因縁のありすぎる男だった。

その海馬とも縁のある、長髪蒼鷹風呂キザ野郎が、なんでまた遊戯を誘ったのだろつ。

「シュレIDER社主催でやるゲームショウがあるんだよ」

遊戯が答えた。

「それに招待されたっつーのかよ？」

「うん」遊戯はこくりとうなずいた。「デュエル大会もあるんだけど、それを見に来ないかって。プレイはしないでい

いっついで」

「箔をつけるための招待客というところらしい。」

たいいの人は知っていると想つが、デュエルモンスターズというカードゲームがある。先ほど名前のでた海馬もそのカードゲーム関連の商品の開発をおこなっている。シュレIDER家も御同様だ。そして遊戯は、そのゲームの世界ではたいへん有名だった。

理由は、単純

強だからだ。

今のところ公式な試合で、遊戯に勝てたやつは誰もいない。

だから遊戯は、決闘王 デュエルキングと呼ばれていた。本人は、その称号について、あれは『もつひとりのボク』の名刺だし、自分の力じゃないし、気恥すかしいしと、否定したくてたまらないよつなのだが、いっぺん世間に広まってしまつと、そつ簡単に恋えられるものでもなかった。「レオンくんからも連絡きてさ。ついでに観光しないかって。この間のKCCグランプリのお礼も兼ねて」

レオンというのはジークの弟である。キザ野郎のジークと異なり、人間味のある全般的によくできた弟だ。それに誘われるのはいい。

だつたら、巻き込まれたオレ様と杏子と本田と御伽もつれていけ。

ぶーぶー文句を言つてやったのだが、たまには一人旅もいいんじゃないの？」と杏子は後押しした。

「でも、お土産は忘れずによろしくね。遊戯」

「もっちゃんー！」

遊戯は、任せておいてよと小さな胸をたたいてみせた。

*

「なんで賛成したんだよ」

オレは帰り道、杏子と一緒に歩きながらたずねた。今

こいつとバイト先（ファミレス）が同じなのだ。夏のエジプト旅行の代金を立て替えてもらったおかげで、杏子には頭が上からない。

「気晴らしになればいいかな、って」

杏子はそう言つて、ちよつとさびしげに微笑んだ。

去年の夏、高校二年生の夏に、居なくなつてしまつた奴のことを思っているのは、鈍いオレにもよくわかつた。

オレたちの友人であり、遊戯が「もっつひのりボク」と呼んでいた男は、アテムという名前を取り戻して、行って

しまつたのだ。半年以上経つけど、まだその記憶は色濃くオレたちに跡を残していた。

「お前も遊戯についてけばよかったんじゃないの？」

杏子は、アテムのことが好きだつたのだ。オレはそのことと、まったく気が付いていなかった。御伽に言われなかつたら、今でも分からなかつたのにちがいない。レベッカくらいはつきりした態度をとつてくれれば、分かるんだだけだよ。

オレもアテムのことは好きだつたけど、杏子のは友情じゃなくて恋だつた。

「馬鹿ね」

杏子はそう言つて、微笑んだ。

失恋をした杏子は、前よりちよつとだけ大人びて、きれいになった。ほんのりと色づいた唇がやわらかそこに光っている。物寂しげな女つて、ちよつとそそのよな。なんつのか、こつ、ほだされるといつか、視線が色づいていつか。

「杏子よ」

「何？」

「オレと付き合わねえ？」

杏子は、信じられないものでも見るよつな目付きで、オ

しを見た。深呼吸をしたあと、腰に手をあてて

「理由を説明しなさいよ、理由を」

と、にらみつけてくる。オレは肩をすくめた。

「いや、お前って、けっこう美人だし。胸もあるし」

「あんたね」

「今、誰とも付き合っていないんだろ？」

「城之内に心配される筋合いはないわよ」

「ずんずんと先に歩いて行ってしまっ」

「んだよ。さみしーのはオレだって同じだぜ」

「遊戯のことを思ったら、そんな言葉、死んでも口にはきかないわ」

その視線はオレを焼き焦がすようにきつかった。一瞬だけど、マジで惚れた。かたちのいい顎をかるく反らして、きつとにらみつける杏子は、とても格好良かった。オレは走って、杏子の前に出た。顔をのぞき込む。

「なあなあ。オレじゃダメかよ？」

「あんたテキトーだもん」

「どこが？」

「こいつとこころが」

杏子は立ち止まり、オレの方をしっかりと見つめた。どこか大人びた顔で、ふっと笑っ。

「あんたね」

「なによ」

「本当に好きなひとができたときに困るわよ。絶対」

そつ言つたり、くるりと背を向けてすたすたと歩いて行ってしまった。オレはあわてて後を追っ。

ちえ、うまく行かねえの。

*

別に杏子と気ますぐなることもなかった。だからこそ、あんなことを言ったのだが。許るされるのは気楽でいいものだ。オレはそついうぬるま湯みたいな関係が嫌いじゃなかった。恋愛というのは、そんなものだろうと思っていたのだ。

その当時は。

春休み中はバイトに明け暮れた。

杏子の携帯電話には、遊戯からメールが何通か届いた。オレは貧乏人なので携帯をもっていないのだ。最初に送ってきたのはドイツのベルリンからだそつで、いかにも観光名所っぽいところの写真が何枚か添付されていた。でかい門の下で、笑った遊戯の写真もあった。

そこまでは良かった。

帰国予定日に、遊戯は帰ってこなかった。

その日、土産をせびるために、オレたちはみんなで遊戯の家に向かった。

遊戯の家は「亀のゲーム屋」という名前のちいさなオモチャ屋をやっている。遊戯のじーさんの道楽でやってるようなごちゃまじりとした店だ。

遊戯は、今日の午後遅くに日本に着く予定で、オレたちはじーさんと一緒に空港まで迎えに行くつもりだった。

「ちーす」

ドアをあけていつものように挨拶しながら店に入っていくと、どつしたというのだから、青い顔をしたじーさんが腰を抜かして泡を吹いていた。電話の受話器を持った手がぶるぶると震えている。

「じーさん!」

オレは大声をあげた。

「お、おい! どうしたんだよ!」

本田も同様にあわてて、じーさんの肩をゆさぶってる。

「電話……遊戯が……」

「遊戯がどつかしたのかよ!」

「遊戯が……事故に……」

事故!?

オレは電話に飛びついた。

「もしもし!」

「xxxxxxxxxxxx、xxx、xxxxx」

横文字が流れてくる。英語が何語かわからない。日本語じゃないのだけは確かだった。

「だーっ! 何言ってるのか、まったくわかんねえ!」

頭を抱えてると、やけに冷静な声が店内に響いた。

「城之内くんと本田くんは、おじいさんを部屋に運んで」

真崎さんは、お母さんを捜してきて

「わかったわ!」

「ボクは……?」

「猿良くんは、店番」

テキパキと指示を出すと、御伽は受話器をオレから奪って、ペラペラしゃべりはじめた。

あいつ英語しゃべれたんだ。

オレと本田は、指示された通り、じーさんを居間に運び込んで寝かせた。隣の家で話しこんでたという遊戯の母親を、杏子が連れてくる。一同勢揃いしたところで、電話を終えた御伽が居間にやってきた。

「で、どつなんだよ、さっきの電話」オレは勢い込んで訊

ねた。

「そっだ、そっだー」と本田。

「遊戯の具合は？ 怪我してるの？」杏子が心配そうにたずねる。

「ああ、もう、お父さんに電話しないと……」

「ちょっと待っててください。最初から説明するから」

御伽が名探偵の謎解きのようにみんなを前に説明した話による「ことば」。

遊戯は、ドイツだけではなくて他の地方も回っていた。

レオンも一緒だった。昨日からシユレイター家に縁のある者のルーマニラの地方都市の屋敷に招待されて、観光を楽しんでいたのだが、途中で交通事故に遭った。いま病院で手当を受けている最中である。

「事故ー」

杏子が息を飲んだ。

遊戯のママさんがへたりと床に倒れ込んだ。本田があわてて抱き留める。

「容態は!? 遊戯はどうなんだよ、おいー」

オレは御伽に掴みかかった。

「落ち着いてよ。命に別状はないってさ」

御伽がそう言つと、全員、はーっと深い安堵のため息を

ついた。

「様子をみないとほつきりしないけれど、数日で帰ってこられるって言うてましたよ。遊戯くんは今、薬で眠ってるけど、起きたら電話させようって」

それを聞いた遊戯のママさんは、居間の床にべったりと座り込んだまま「もうあの子ったらドジなんだから……」と放心したようにつぶやいていた。

2

オレたちは二年に進級した。

あたらしいクラスには、代わり映えのしないメンツが揃っていた。獏良と御伽は「同じクラスになれてよかったー」だの「これからよろしくねー」だの、女に取り囲まれてキヤーキヤーと騒がれていた。本田の周りにはあいかわらず女ツツ気がなかった。ほっとするぜ、我が友よ。

始業式が始まるまでの時間、集まってたらだらと話をする。春休み中どうしてたとか、昨日のテレビ番組は面白かつ

たとか。そんなもんだ。

「おはよー！」

教室の入り口に、やけに小柄なツンツン頭が見えた。

「遊戯！」

オレは駆け寄って、遊戯のちいさな身体をぎゅーっと抱きしめた。

「無事だったんだな。このおー！」

「くるしいー！」

頭をがしがしとかき回してやって、背中をばしばしと確かめるように叩いてやる。それから片膝をついて、遊戯の顔をのぞき見た。事故の傷跡は、まったく見つからなかつた。すこし色が白く見えるのは気のせいだろう。手をとってぶらぶらさせてみる。動きに問題もないみたいだ。外から入ってきたばかりのせいか、ふれた肌はすいぶんと冷たかつた。

「あんま、怪我したっぽくねえなあ」

「なんだよ、城之内くんってばー！」

遊戯がむーっと口をへる字にすると、ちいさな白い八重歯がこぼれた。

……八重歯？

遊戯に八重歯なんてあったらどうか。

「いーかげん 離してよ」

「あ、おじ」

ひょいっと抱きあげて、席に運んで座らせた。わらわらと他のやつらもやってきて、遊戯になつてく質問攻めをする。

「具合はどつ、遊戯君？」

「ありがとつ、御伽くん。もうほんとに大丈夫だよ」

「怪我みせて。お腹？ 背中？」

「ひっぺがしてのそこつとしないですよ、獺良くん」

「土産はどつした」

「もってきたよ、本田くん。あとで渡すね」

本当に問題は無さそつだった。オレは心底ほつとした。

ふと気が付くと、野崎と話をしていたはずの杏子がオレの隣に立っていた。

「杏子の分も、ちゃんとお土産買って来たからね」

遊戯は、杏子に向かって微笑みかける。

「もう、遊戯ったら、杏子は困つたように、無事に帰ってきたら、それでいいんだからね」

そつ言つた杏子の瞳は、慈愛で満ちていた。

そのとき、初めて気になった。杏子がアテム。この呼び方は慣れないな。つまり、もうひとりの遊戯のことを好

きだったのを、遊戯本人は知ってるんだろつかと、複雑じゃねえかな。そついつのつて。

オレだったらどうなんだろつ。

恋といつのは、オレにはあまりよくわからない問題だ。

*

始業式はいつものように講堂で行われた。先生の話なんぞ、もちろん聞く気はない。パイプ椅子に座って、ほげつと窓の外をながめる。名残の桜がひらひらと花びらを散らしていた。しばらくすると、それを見ているのにも飽きて、マンウオッチングに精を出した。

御伽がつまらなそうに髪の毛を弄っている。海馬の席が空いていた。あいつは試験の時にしか来ないつもりなんだろつか。

出席番号順で並んでるから、他の知り合いはみんなオレの後ろだった。

遊戯は武藤の「む」だから、かなり後ろの方だ。先生の話はつまらんし、手でも振ってやるつかと振り向いた。

その途端

「

遊戯のちいさな身体が、ぐらりと椅子からすべりおちるのが見えた。

「遊戯ッ！」

あわててオレは駆け寄った。抱きかかえて、顔をべちべちと叩くが、反応がない。苦しそつに眉根を寄せて、浅く息を繰り返している。

こつ見えて遊戯はトラブルに巻き込まれることが多く、喧嘩で殴られたり、吊られたり、火事にあつたり、死の体感ゲームをやつたり、闇のゲームで戦つたりしてきた。そのわりにけつこつ体力あるみたいで、すぐにけろつとした顔で起きあがってくるのだ。

だけど、こんな遊戯は初めて見る。

遊戯の額に手をあてて、ぎよつとした。冷たい。教室でふれたときも、すこし冷たいと思つたが、それどころではなかつた。いつもなら赤みがさしている頬は、紙のように真つ白だった。まるで死人のようだ。

事故のことが頭にあるせいか、いやな言葉が浮かび上がってくる。オレはそれを振り払つよつに首を振った。

「遊戯、しつかりしろよ、遊戯」

返事はない。

「だれか倒れたのか？」

「なに、貧血？」

状況がわからない周りがざわめいている。本田や猿良たちが、こちらにやってくるよつとしたが、生活指導の鶴岡に追いつ返されていた。

「お前らが来てても、なにもならんだろう」

「けどよ！」本田ががなる。

「静かにしろ！ まだ式は終わってないんだぞ」鶴岡が睨みを利かす。「城之内、武藤を保健室に連れて行ってやれ。担架持ってくるより、そのほうが早いだろう」

オレは素直に鶴岡の指示に従った。小柄な遊戯の身体を赤ん坊のように抱きかかえ、まっすぐに保健室に向かった。

*

「先生！ 急患だぜ、急患！」

扉を蹴破るよつな勢いで、保健室に踏み込んだのだが誰もいなかった。こういうときに保健の先生というのは待機してゐるんじゃないのだろうか？ とりあえず、制服の上を脱がせるとベッドに遊戯を寝かせた。ちよつと考えたが、ズボンのベルトもゆるめてボタンを外した。楽にしておいたほうがいだろう。いつも遊戯が身につけている黒革の

ぶつといちヨーカも首から外して、枕の横に置く。

遊戯の息が浅い。身体が冷たいのに顔や、首まわりに汗を掻いている。苦しいのだろうか。保健室の隅にある水場で濡れたタオルをつくって遊戯の顔のあたりを軽く拭いた。そのままタオルを頭にのせる。

「あ……？」

遊戯の目がうつすらと開いた。

「気が付いたか」

「……ちよつと、まぶしい」

ベッドのまわりをぐるりと取り囲んでいる間仕切りのカーテンをぎゅちり閉めると、すこし薄暗くなった。これで、いくらかはマシになっただろうか。ベッドの上で、遊戯は腕を抱くよつにして、何かをつぶやいている。オレは遊戯に顔を近付けて、聞いてみた。

「どつた、具合」

「そむい……」

「寒いのか、ちよつと待ってる」

隣のベッドから毛布を何枚も持ってきてきて遊戯にかけた。誰も使っていないから問題ないだろう。それでも寒さが治まらないのか、遊戯は身体を丸めて縮こまっている。

ああ、もう先生どこいったんだよ。

「どっか、痛いところあるか？」

だるいのか、遊戯は緩慢に首を振った。

「のど、かわいた」

オレは急いでガラスのコップに水を汲んできた。遊戯を抱き起こして、口に宛がってやる。遊戯は少しだけ口に含んだが、そのあとは疲れたように倒れ込んでしまった。飲みきれなかった水がこぼれて、喉元が濡れた。シャツが水に濡れて、透けている。

拭わないと。

胸もとのボタンをはずし、保健室に置いてあった白いタオルで拭いてやった。遊戯はじつと目をどじたまま、苦しそつに何がちいさく呟いている。なにを言ってるのだろうか。

オレは耳を寄せた。

「のど……かわいた」

「水じゃだめか？ 甘いモノがいいのか？」

ぬるま湯のほつがいいんだっけ？ それともスポーツドリンクか？ オレはふだんから風邪ひとつしないタチなので、こういうときに対処方法がわからなくて困る。李子でも連れてくればよかったのだらうっか。

「……ほしい」

遊戯は、はぁ……と呻くようにすいすい吐息をついた。

「何が欲しいんだ、遊戯？」

オレはたずねた。

「……城之内くん」

遊戯の大きなひとみがオレをみている。苦しいのが、半分閉じられていて、睫毛が影を作っていた。こっぴどみと意外に長い。女の子みたいにそろっと長いわけでも、くるんとしてるわけでもないが、遊戯のでっかい目を保護するように睫毛が細かく密生していた。ちいさな鼻、その下の、ちいさな口。ピンク色の舌が、白い八重歯をちりりと舐めた。

八重歯？

遊戯の犬歯は、やけに大きく見えた。まるで牙のように鋭く尖っていた。

妙だ。

遊戯に八重歯なんてなかったはずだし、あつたとしてもこんな大ききはなかった。

オレは吸い付けられるように、遊戯の口元を見ていた。

ちいさな桃色の唇が濡れて、淫らに光った。白い滑らかな喉がこくりとうごく。

オレの身体の芯が、ずんと甘く痺れた。

この感覚には、覚えがある。

欲望だ。

それも性的な

おかしい。なんでこんな気分になるんだろつ。そりや高校男子のアレは無節操に立つもんだが、いくらなんでモ状況をわきまえて無さ過ぎる。どつしたんだ、オレは

「飲みたい……」

遊戯の眼がオレを見る。奇妙な色をしていた。こんな遊戯は初めて見る。怒ってるところも見たことがある。泣いてるところも見たことがある。哀しみに暮れているところも、覚悟を決めたところも、遊戯のいろんな表情をみてきたと思う。だけど、こんな遊戯は見たことがなかった。

夕暮れどきみたいなすみれ色の瞳は、オレが理解できない色をしている。

オレは視線を、遊戯から外すことができなかった。砂鉄が磁力で引きつけられてびつたりと離れられないように、オレの目は遊戯に釘付けだった。それだけじゃない。身体も、指一本さえ動かせない。

「遊戯……」

声が出ているのかどつかさへ、わからない。

ゆらり。

遊戯が身体を起し、オレの首筋に腕をまわした。まる

で恋人同士がする熱い抱擁のように、びつたりと首筋に顔を埋める。吐息が首筋にかかった。

濡れた体温かいものが、そこに触れる。

「……」

遊戯の舌だった。濡れた舌先は、ゆっくりと何かを探し求めるかのようにオレの首筋を這った。ソクソクとオレの身体が震えた。恐怖なのか快感なのかわからない。

唇が動脈の位置をさぐりあてたかと思うと、遊戯はそこに歯を突き立てた。

3

どくん

心臓が、激しい音を立てて鳴っている。それが血管を伝わって響く。まるで体のいたるところで大太鼓を叩いているようだった。ちゅうちゅつと、まるで子供が指をしゃぶっているみたいなきがした。遊戯がオレの首から血を啜っている音だった。

不思議と、痛みはなかった。

恐怖もなかった。

あんまりにも予想外の出来事だから、オレの脳が反応できないのかもしれない。

ただ呆然と遊戯のなすがままに任せている。

栓を抜いた水がひゆるひゆると吸い込まれていくように、オレの身体の間から、何かが遊戯のなかに注ぎ込まれていくのがわかった。何って、血が。

でも、それだけじゃない。なにか熱のようなものが奪われていく。身体がどんどん冷えていく。身体の中に冷水を注ぎ込んだように、冷蔵庫の中で凍らせたかちかちのアイスクリームのようにオレは冷たくなる。

こくと、遊戯の喉が鳴った。

遊戯が離れた。

オレは遊戯を見た。

遊戯もオレを見上げている。

ちいさな口元から、一筋だけつと赤い血がこぼれていた。

それを見た途端、ひえたはずのオレの身体に火がついた。理解できない衝動だった。

オレは遊戯の身体をだきしめて、唇を激しくむさぼった。

オレの血と、遊戯の唾液がまざりあった。鉄さびのような血の味が、純度の高いアルコールのようにオレを燃やした。口から、鼻孔から、遊戯の味が揮発していく。

舌をきつくからめ、唾液をすった。遊戯の口の中をぜんぶ喰らい尽くすように、上あごをなぞり、赤い歯肉を舐め回した。いつの間にか血の味はしなくなっていた。

はあ……と息をつきながら、離れる。大きく深呼吸して遊戯を見た。

遊戯もオレを見ていた。

あの目だった。

眠る寸前のように半分だけまぶたを閉じて、なんとも言えない色でオレを見つめている。

さっきはわからなかった遊戯の瞳の色の意味が、今のおしにはわかった。きつとオレも同じ目の色をしている。

あれは欲情だ。どうしようもないほどの、抑えきれないほどの灼熱の欲望の塊だ。

遊戯とエロ本を回し読みしたことある。男同士だし猥談もよくする。そついつときの遊戯は、鼻の下をのぼして、えつちだよねといながら濡れた目付きをしていた。今の目に、すこしだけ似ている。だけど、そんなのはお子様用のシャンメリーみたいなものだった。途中で止められる程

度の、ひとに見せても笑い飛ばせるような幼い欲望だ。

今感じている衝動は、アルコール度数90度を超えるウオッカのようなまじりけなしのモノだった。自然発火してしまいそうだ。オレの中で炎が燃えている。

オレは知らなかった。こんなに純粹にただ欲しいと思うなんて、オレは知らなかった。

したい。セックスがしたい。さわりたい。舐めたい。吸い付きたい。擦りたい。入りたい。だしたい。交わりたい。止めることなんてできるわけがなかった。

遊戯の小さな身体をベッドに押し倒した。シャツのボタンを外すのが面倒で、勢いよくめくりあげた。うすい胸があらわになる。ここが目的地ですよと言ってるみたい。小さな桃色の乳首に、オレは吸い付いた。

「……っ」

遊戯がうめいた。オレはかまわず、小さな乳首を甘噛みした。ちゅうちゅと嚼り、歯で遊戯が悲鳴をあげるまで噛む。それだけでは足りなくて、胸も、脇腹も、首筋も、二の腕も、遊戯の身体を食い尽くすように舐めまわした。唇がふれて、舌で舐めるたびに、遊戯からくぐもつた声がびびいた。遊戯の子供のようになめらかな肌は、さつきまでの冷たさが嘘のように熱く燃えていた。アイスクリー

ムに酒をぶっかけて火をつけたよ。オレはのこさず、その甘さを嚼った。

どろどろとオレは融けていく。欲望にとけていく。

オレのペニスは硬くそり立って、制服のズボンを押上げていた。下着まで染みている。オレはもどかしげにジッパーを下ろし、前を自由にしゃべった。それから、遊戯のズボンを下着ごとぐいと引っこ抜く。さつき寝かせる前にベルトをゆるめておいたせいで、簡単にズボンは脱げた。むき身の白い下半身が目の前にあった。遊戯のおさないペニスも赤く色づいて、硬直していた。先端からこぼれた液体で猥らに濡れている。

やりたい。

だしたい。

擦りたい。

「城之内……くん……」

オレはかまわず、自分のペニスを遊戯のそれに擦りつけた。足をからませて、手で掴んで、同時に擦る。オレのペニスと、遊戯のペニスがふれあって、ぬちゃぬちゃと粘着質な音をたてた。

「あっ……あっ……あっ……」

遊戯は鼻にかかったあまい声をあげつつづけている。オレ

は声もだせず、ただ獣のように荒く息を吐いていた。気持ちがいい。何も考えず、考えられず、オレは自分と遊戯の陰茎を同時にしこいた。ウラスジがいいとか、カリがいいとか、そついつことは何も考えていなかった。すこしでも思考が残っていたら、きつと遊戯に突っ込んでいたと思う。でも、そのときには馴らすとか、入れるとか、そついつことは考えている余地がなかったんだ。

技巧も技術もなく、ただオレは欲望を擦りあげた。

「あぁっ！」

遊戯のペニスがぶるりとふるえて、白い液体を吐き出す。オレの腹にかかった。熱くて気持ちよかった。遊戯はくったりと倒れ込んだが、オレはまだ物足りない。だしてない。

遊戯のほそい片足を肩に担ぎあげると、ぬるぬるとまとわりついた白濁液を潤滑剤代わりにして、またぐらにオレのペニスを擦りつける。遊戯のそこは、ぐちゅぐちゅと淫猥な音をたてていた。オレはほとんど何も考えず、ただ腰をこすりつけていた。ちいさな身体を揺らし、欲望を追い上げた。気持ちがいい。腰の奥のほうから、背骨を通って、ぞくぞくと快感がはしりぬけていく。予兆だった。

体中が喜びにふるえる。でる。いく。出てしまふ。

「遊戯ッ！」

オレは遊戯の名前を呼んで、白いちいさな身体に大量の白濁液を放出した。